



これまでのジャーナル投稿を振り返って

神戸大学 経済経営研究所
准教授 村上 善道

はじめに

日本でもチリでも、実年齢より大幅に年下にみられることが多いが、私が大学院に入学してから20年が経とうとしている。大学院生の頃の出来事は、まだ昨日のことのよう鮮明に覚えていることも少なくないが、同じ年月が経てば私は定年間近ということになる。時がたつのは早いもので、私の研究者としての人生もちょうど折り返し地点に来ているということなのだろう。

ところで、本学および当研究所の現在の業績評価基準のもとでは、Web of Science (WOS) に収録された査読付き国際ジャーナルに論文を掲載することが最も重要であり、私の理解では、それ以外のものに関しては評価のウエイトは低くなっているようである。私も自身の業績評価と少しでも研究所に貢献できればという思いで、研究に対するエフォートは最大限、最初から国際ジャーナルの掲載をめざして行うようにしている。お恥ずかしい数字ではあるが、このコラム執筆時点で Emerging Sources Citation Index (ESCI) 収録誌を含めれば、単著2本、共著論文（いずれも私が筆頭著者兼責任著者）5本の合計7本の論文を国際ジャーナルに掲載済みである。一方で、（私の研究業績としてカウントされることはない）『神戸大学経済経営研究所100年のあゆみ』を除いては1冊の著書も編著も出していない。今回のコラムは、これまでの研究活動の中心と言えるジャーナル投稿を振り返って、考えつくことをまとめてみたい。

国際ジャーナルを目指すことのメリット

私の専門（ラテンアメリカ経済に関する実証研究）という立場から国際ジャーナルをめざして研究を行うことの最大のメリットは、何と言っても論文の潜在的な投稿先が多数あり、また私自身の専門が世界的に見れば全くマイナーでなくなるということだろう。残念ながら、日本の中では、私と同じような問題意識・手法のもとでラテンアメリカ（特にチリ）の経済に関する実証研究を行っている者は極めて僅少である。従って、日本の雑誌に投稿したところで、必ずしも適切な評価が受けられるとは限らないだろう。また日本の学术界で一般的に私の研究分野の重要性が理解されているとも言えないと思う。4年ほど前に、私の提出予定の科研調書に関する University Research Administrator (URA) の方からのコメントを伺う機会があったが、「なんでチリを研究するのか？」というコメントが中心で、何か極めてめずらしく特殊なことをやっているという印象を持たれてしまったようであった。しか

し、世界レベルで見れば私と同じような問題意識・手法のもとでチリ経済に関する研究を行っている研究者は多数おり、国際ジャーナルに投稿すれば、私の研究を専門的知見から評価してもらえることになる。逆に言えば、私の研究に関する潜在的な競争者は多く、後述するように自身の進めている研究に類似したものが既に国際ジャーナルに掲載されることを常に気にしながら研究をする必要がある、ということにもなる。

実際、経済学の実証分野でチリのデータを使用した研究のプレゼンスは高く、開発経済学や国際経済学のトップジャーナルだけでなく、いわゆる 5 大誌にも多数の論文が掲載されている。その背景には、詳細は今回のコラムでは省くが、チリが経済学的にみて極めて重要な政策を多数実施してきたことに加え、信頼性の高くユニークなマイクロデータが多数あり、少なくともそのうちのいくつかは Web 上で公開されているので、そういった政策の因果的効果を識別することが可能であるということもあげられるだろう。

勿論、査読付きのジャーナルへのアクセプトをめざす過程で、自身で何度も論文を読み直しては書き直す、また推定を繰り返したり直すということ自体が論文の品質保証につながっていることも重要な点である。人間がやっている以上、計算やデータに関するミスはあり得るし、自分の書いた文が正確でない場合や必ずしも自身の意図することを正確に表現できていない場合もある。しかし査読付きジャーナルの場合は、何度もチェックが入ることによってこうしたことは防げる可能性は非常に高くなる。そういったことを踏まえて、現在、私は査読のないものを論文として公表することは消極的であるし、制度上査読のないものをやむなく公刊しなければならない場合は、できるだけその分野に詳しい方に読んでもらいコメントをもらうようにしている。

どこに論文を投稿するか

国際ジャーナルへの投稿を目指す上で、死活的に重要なのは、どのような戦略のもとでターゲットジャーナルを決めるか、ということであろう。一方でこの点は個人の価値観に関わる問題でもあり、アドバイスをもらえる機会は決して多くはないようにも思われる。私の理解では、一般的にはランク（インパクトファクター）の高いジャーナルから投稿し、仮にリジェクトされてもよいコメントがもらえれば、それをもとに改定し、投稿を重ねていけばいつかアクセプトに至るということが、王道の戦略として位置づけられているように思われる。

しかし、このような投稿戦略はいくつかの点でかならずしも現実的でない場合もあるように思われる。第 1 に、既に任期のない雇用を得ているか、あるいは任期のある雇用であってもある一定期間まとまって研究に専念できる者にとってはこのような戦略でよいかもしれない。しかし限られた研究時間で一定期間内に目に見える成果を出すことを求められている者にとっては、このようなことをしているうちに研究成果を出すことができず職を失うリスクを背負うことになるかもしれない。第 2 に、他の分野に関してはよく分からないが、少なくとも開発経済学・開発学系のジャーナルは、近年投稿者数が急増しており、さらにユニークでオリジナリティの高い識別戦略が求められることが一般的であると思われる。特に著名なジャーナルにおいてその傾向が顕著であるだろう。もちろん、そういった水準に

達する研究がコンスタントにできる方はそれでよいのかもしれない。しかし、私自身が（回数は多くないが）こういった開発経済学・開発学のトップに近いと言われるジャーナルに投稿した経験を振り返ると、アドミニストレーション上の時間が多くかかり長い時間まった挙句にデスクリジェクトされたり、査読に回っても最初からリジェクトありきでほとんど意味のないコメントしかもらえず、論文を改善するという点でも役に立たなかったこともあった。

私自身は、2018年度以降研究を行うことができる時間が非常に限られてくると、上記の王道の戦略とは別の戦略が必要であると考えようになった。そこで基本的に現在まで（私が主体的に投稿先を決められる限り）採用している投稿戦略は、WOSに収録されているジャーナルであれば、ランキングやインパクトファクターといったものは頓着せず、採択可能性ができるだけ高そうで、かつ返事が早そうなジャーナルに最初から投稿するというものである。採択可能性が高いジャーナルを選ぶ基準は、やはり自分の研究と類似したテーマ、問題意識、対象地域、手法の論文が掲載されていることである（もっともテーマや対象に関してはあまりに類似していると掲載可能性は下がるだろう）。そのようなジャーナルは当然ながらそのジャーナルの過去の論文を引用するのも容易であるし、ジャーナルからすれば査読者を探すことも容易であろう。2016年に本学に着任後、計2件のサーベイ論文を執筆したことは、どういうジャーナルにどういう内容・レベルの研究が掲載されているかを知ろうえで大変役に立ったように思う。レスポンスまでの速さに関しては、確固たる情報が必ずしもあるわけではないが、論文のステータスに関する決定までの期間を公開しているジャーナルもあり、研究者口コミに加え、そうした情報も参考にしている。

もっとも、このような投稿戦略をとってきたこともあり（もちろん私の研究レベルを反映して）、掲載されたジャーナルのランキングやインパクトファクターという点で見劣りするのも事実である。前述の合計7件の論文のうち、ESCI収録誌3本を除くWOS収録誌4本はいずれも、残念ながら二神ほか（2016）のTOP200にすら含まれていない。従って、この基準では私は何ら研究所に貢献できていない。

メジャーリビジョンが目標

これまでのジャーナル投稿を振り返って言えることとして、最初の関門がデスクリジェクトを回避することであり、次の極めて重要な関門は査読に回ってリジェクトされない、即ちメジャーリビジョン以上の判定をもらえるか否かということになるだろう。極めて重要、というのは、何らかのリビジョンの判定までいけば、かなりアクセプトの率が高くなるということであり、その意味で目指すはメジャーリビジョンの判定をもらうことになる。私自身何らかのリビジョンの判定を受けた場合は、1件の論文を除き最終的にはアクセプトされている。

リビジョンの場合は、とにかく余計なこだわりは捨てて、ひたすらレフリーのいう通り直すことが重要なようである。もっとも、その通りしようにもそのままではデータが存在しない場合や、逆にその通りすると論文の主要結果が根本的に崩れてしまうような困ったコメントをもらうこともある。しかしそういった場合もできませんと書けばリジェクト決定な

ので、そのコメントの重要性を理解したということをしっかり見せ、最大限できる範囲で何らかの対処をしたということを見せることが重要なようである。最近掲載してもらったジャーナルでもそういったコメントが複数あり、正直厳しいだろうなと思っていたが、基本的に上記の方法でアクセプトされてしまったので、かなり意外であった。またレフリーのコメントがそもそも誤解に基づいている場合もある。そういった場合でも「ご指摘ありがとうございます、自分の書き方が悪かったので直しました」とレスポンスレターに書くようにしている。そういった意味でも、レスポンスレターの書き方も重要なようである。これに関しても共著論文を通して大塚啓二郎先生にご指導いただいたことは現在に至るまで大きな財産になっている。私も国際ジャーナルからレフリーを依頼されるようになったが、レスポンスレターの書き方が非常に稚拙と感じる論文を査読したことがあった。論文と同等以上の気合いを入れてレスポンスレターは書くべきであると思う。

とにかく早く投稿することが重要

これまでのジャーナル投稿を振り返って、やはりとても重要であると思うことは、世界レベルで見れば自分の研究は極めてありふれたものであり、日々世界のどこかで誰かが類似した研究を行ってそれをジャーナルに投稿している可能性が高いので、とにかく早くジャーナルに投稿しないと、自分の論文の価値はどんどん下がりどこにもアクセプトされなくなってしまう可能性が高い、ということである。

私自身がこの点を強く認識したのは下記のような出来事があった。私は2018年度から主たる職務としては研究からは離れていたが、2019年8月以降100周年の仕事も先が見えてくる中で、幸いにもゼミの後輩をリサーチアシスタントとして雇用することができた。研究に復帰するにあたり、彼にやってもらったことの一つは、私に関係ある研究が掲載される可能性の高いいくつかのジャーナルに関して、指定したキーワードがヒットする論文をすべてダウンロードしてもらうことであった（この判断は、今から思ってもとても正しい判断であったと思う）。そこで分かったことは、ちょうど2018年に開発経済学のいわゆるトップジャーナルであるJournal of Development Economics (JDE) に、滞っていた私の研究2件と極めて類似した研究2件（1件は被説明変数は違うが識別戦略が同じ）が既に掲載されていたことであった。私は、それらの研究を既に旧勤務先の国連ラテンアメリカ・カリブ経済委員会と当研究所のディスカッションペーパーとして2013年、2016年にそれぞれ公表しており、さらに言えばうち1件の論文の後半は、私が2014年にESCI収録誌に掲載した論文と基本的なモデルは同じであった。しかし、それらの私の研究は残念ながらこれらのJDEに掲載された論文2本には全く引用されていなかった。

このことは、よく言えば、私の研究の着眼点は悪いものではなく、うまくまとめれば、私の研究もJDEのようなジャーナルに掲載された可能性もあったということを示しているのかもしれない。もっとも、先に書いたように2本のサーベイ論文を書いてわかったことの一つは、(フィールドの)トップと言われるようなジャーナルにも、「著名な著者が書いた必ずしもオリジナリティが高いとは言えないような研究」も掲載されている、ということである。従って、仮に私がそれなりに研究に専念して、王道の投稿戦略をとってJDEに投稿

していたとしても、やはりリジェクトされていたのではないかとも思う。

もっとも、チリという国を私が対象にした以上、このようなことが起きるのは致し方ないようにも思う。前述の通り、チリは多くのマイクロデータを公表しており、そういったデータを使用する場合の参入障壁はスペイン語が理解できるかだけである。従って、公表されているマイクロデータを使用する限り、このようなことはこれからも起きうと考えた方がよいであろう。この出来事は、私が研究に時間がとれるようになった後も、基本的に「採択可能性が高そうで審査が迅速そうな WOS 収録誌に最初から投稿する」という投稿戦略を維持するモチベーションになっている。また現在に至るまで、リサーチアシスタントの重要な業務として、関係ありそうな研究が既に出ていないかを徹底的にチェックしてもらうようにしている。

最近、私にとっては、ようやくまとまった時間を確保して細部までこだわったロバストネスチェックをして投稿したという意味で、自信作と言える研究に対する返事が返ってきたが、残念ながら2回続けてリジェクトであった。この研究もそもそもは当研究所に2016年に特命助教として採用していただいた際のリサーチプロジェクトであったものを長いブランクの後2021年度になって再開したものである。しかしこちらもこの間に既に多くの類似研究が残念ながら掲載されてしまっており（その意味では、負け惜しみではあるが、やはり私の着眼点は悪くなかったのであろう）、リジェクトの主要な理由は類似の研究がたくさんある中で貢献が少ないということであった。とはいえ、このまま何もしなければ、ディスカッションペーパーのままで終わってしまうので、もちろんすぐに別のジャーナルに投稿する作業を目下行っている。世界レベルで見れば、自分の研究は極めてありふれたものであり、とにかく早くジャーナルに投稿しないとどんどん価値が下がる、このことをこれからも肝に銘じたいと思う。

おわりに

これまでのジャーナル投稿を振り返って、リジェクトほど嫌なものはないし、時とすれば自分の研究を否定されるような気持ちにならないこともない。しかし、ジャーナル投稿を行う限り、リジェクトはついてくるものであり、投稿できるジャーナルは多数あるので、あまり気にせずどんどん次に投稿するのが大事であると思いたい。プロ野球の野村克也元監督の名言に「勝ちに不思議の勝ちあり、負けに不思議の負けなし」というのがあるようである。しかしジャーナル投稿に関しては「負けに不思議の負けあり」ではないだろうか。必ずしも合理的と思われない理由でリジェクトになることもあるし、論文をまともに読まずにリジェクトする意地の悪い査読者にあたってしまうこともある。もちろん、反省すべきことや改善できることがあれば改善するのは当然であるが、それ以外は余計なことは考えずに、どんどん投稿することが、（ジャーナル名にはこだわらず何でもよいから WOS 収録誌への掲載をめざすのであれば）重要であると思う。

ところで、昨日（12月9日）、Research Gate が、私の論文に新しい引用があったことを知らせてくれたのだが、引用先は、4年ほど前に私が突然メールで相談を受けたチリ出身の研究者が筆頭著者による WOS 収録誌であった。私とは全く面識なかったが、当時彼はイギ

リスのある大学院に在学しており、前述の 2014 年に私が ESCI 収録誌に掲載した論文と同じことをやりたいので計算方法を教えてほしいというメールを送ってきたのである。こういった経験は初めてであったが、私は彼の質問を無視せずそれに答えることにし、その後も何回かメールのやりとりがあった。その後、彼は別の ESCI 収録誌と合わせて私の 2 件のチリの賃金格差に関する研究を先行研究として引用して研究を進め、無事に博士号を取得し、さらにその博士論文を改定したものが WOS 収録誌に掲載されたということのようであった。従ってこれは私にとってもとても喜ばしい出来事であった。トップジャーナルと ESCI 収録誌であれば、その影響力という点では雲泥の差であるが、それでも掲載されれば、このように全く知らない研究者に引用されて新たな研究につながることもあるのだろう。一方でディスカッションペーパーに関しては私のような無名の者では引用されたことはほとんどない。これからも、本学および当研究所の末席を汚す限り、私はチリを中心としたラテンアメリカ経済に関する実証研究で国際ジャーナルへの掲載をめざして研究を続けたいということを記してこのコラムを終わりたい。

参考文献

二神孝一・神谷和也・芹澤成弘・柴田章久（2016）「9 大学経済学研究科及び附置研究所の研究業績比較調査（2015 年）」The Institute of Social and Economic Research, Osaka University, Discussion Paper No. 974.

<https://www.iser.osaka-u.ac.jp/library/dp/2016/DP0974.pdf>